

孤感覚の変容
— 都市の孤独とコモンの矛盾を縫合する集合住宅 —

21719014 小野 杏花
指導教員 細井 昭憲 准教授

孤感覚 他者 SNS
距離 坂道 路地

1 制作の背景と目的

近年のモバイルメディアや SNS の普及により、いつでもどこにいても社会と接続できることから、都市体験は物理空間と情報空間が重層化した経験へと変容している。哲学者三木清が述べた『孤独は山になく、街にある。1 人の人の中にではなく、人と人との「間」にある。』(1)という言葉がある。かつて人の間にあった都市における孤独は、物差しで測れる定量的な距離にのみではなく、今や人と人との精神的な距離の中にもあらわれているといえる。

そこで本制作では、孤感覚の変容における都市居住について提案する。他人と情報によってつながる手段だけが過剰なほど溢れる現代社会において、空間的にも孤立せずコミュニティを強要しない、孤でもなくコモンでもない集合住宅を模索する。

2-1 孤感覚について

本制作における孤感覚とは「物理的・心理的に他者の存在を感じつつ自身はひとりである」と認識している状態であり対他者での感覚であると定義する。その中には空間や社会からの離脱欲求によるものもあれば孤独をおそれる所属欲求によるものもあり、矛盾した欲求が共存する感覚といえる。そうした自己と他者に関する意識を高めるのは五感の中でも特に視覚であり、「見る」と「見られる」の関係が孤感覚を左右する要因の一つである。

2-2 孤感覚の変容

孤感覚は都市居住における空間離脱の欲求に大きく関与してきた。西洋では都市に住まう中で徐々に個人空間への渴望が生まれ、住居の拡大化と分割化が進められた歴史がある。また現行の都市でも儀礼的無関心などの暗黙のマナーに加え、モバイルメディアの誕生によって物



図1 積層する都市体験 → 図2 縫合された都市体験

理空間から離脱し様々な体験が並行して感じられるよう変容してきた。

このような孤感覚自体は忌避されるものではない。しかし現状では物理空間と情報空間、孤感覚とコモン感覚が脈絡なく積層し、それぞれの都市体験は並行して存在している。(図1) それらが層を超えて縫合され、孤である豊かさとそれが集まる豊かさが同時に感じられる豊かな都市体験へと変容させていきたい。(図2)

3 プログラム

孤感覚の変容下で都市に住まう事の価値は、様々な出力形式それぞれにおいて様々な履歴を持つ他

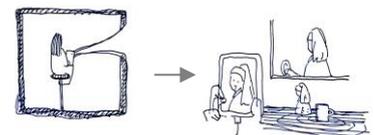


図3 箱の中で関係を紡ぐ液晶、又は窓

者たちと関係性がうまれることである。それは閉じた箱の中に広がりをもたらす液晶画面の枠から、また壁に開けられた窓枠から、また同じ空間を共有する小さなモノたちと同時に紡がれるものである。(図3)

そうした他者との多様な距離感とは、時に人との対話を生み、時に木漏れ日や微風のように現象の連鎖による感触として人の生活を彩っていくのではないか。これらの仮説に基づき都市の個同士が多様な距離を相互に持ちながら集合し、人の中の矛盾を縫合する在り方を考える。

4 対象者

現行の集合住宅の問題点として、その多くが個室を廊下で結んだ完結した箱の集まりであることである。これにより都市のひとは孤立を強いられ、儀礼的無関心などの都市マナーが住宅内にまで及んでいる。これにより核家族をも精神的に孤立させてしまっており、家庭内の不和やトラブルが見過ごされ、DV や虐待・引きこもりなどの問題が家族の中だけで閉じられている。

よって本制作では対象者を一人暮らしのみでなく家族居住やその他の同居形態も含めることとする。そして居室を1人に1住戸配分し、住戸同士の距離間によって関係性を保つ。こうすることで結婚や子の独立による共同体内の居住人数の変化に対応できるほか、共同体の外部の人々との関係性を築きやすくなるのが期待できる。

5 対象敷地

敷地を東京都新宿区荒木町とし、スリパチ地形の周縁にある住宅密集地を対象とする。新宿区は渋谷区に次いで一人暮らし人口が多く、既存のコミュニティと新規居住者との分断が起きている。また、用途地域の境界では建物高さの差による分断がみられ、都市計画上で都市にアンコが醸成されておりこの荒木町も例外ではない。



▲ 写真1 現況敷地
◀ 図4 対象敷地

この場所は谷上に高層マンションが林立し周囲から見下ろされているような景観を持つ。昼間でもビルの陰になり日影が落ちること、そして大通りの裏手であることから、都市のアンコになってしまっている。一方で、東西南の3方向を地形に覆われ北東面の道路に向かって開けていることが特徴であり、周囲を土に囲まれた安心感と一方向へ抜ける方向性を持つ魅力がある。また敷地内には未改修の木造住宅もあり、その多くが空き家であることが問題である。ここに集合住宅を建てることで既存と新規の分断をひとり居住の単位で取り持つていく。

6 設計手法

敷地はスリパチ地形の周縁にあり、激しい坂道や入り組んだ路地が特徴である。窪んだ地底にあった池を拠点に花街として栄えた歴史により、奥まった路地では私秘性が高く、大通りに近づくにつれて開発され高層マンションや飲食店が多くなっている。また坂道はその特性として周囲との関係によって傾斜が認識されることから、周辺を含めてひとつの坂道として領域性を持つ。荒木町はそうした坂道による街のコモンの領域のすぐ傍に、階段や路地による個人的な領域が重なっている街である。この坂道と路地の特性から集合住宅を構成していく。



写真2 路地空間



写真3 坂道と階段



写真3 坂道沿いの間口

7 設計主旨

個が集積し多様な距離での繋がりを持つ集合住宅として、次のような空間体験を創出していく。

・空間離脱の感覚

この集合住宅では、家族単位での入居者でも1人に1住

戸があてがわれる。住戸の窓や屋上から眺める街の景色や近隣住民は、イヤホンをつけて街を歩く感覚のように景色が我有化され、周囲を抽象化して認識する。

・領域性

路地の身体的な領域性を持つ住戸とアプローチ空間、また周囲を包含する領域性を持つ坂道で集合住宅全体を編み込む。これにより住民は孤の性質を保ったまま建築全体としてのまとまりを獲得していく。また住戸に面し私有化された路地や多層的に連なる動線から覗く窓越しの景色などパーソナルな領域が動線空間にも重複していく。

・五感による所属と見る・見られる関係

人間は五感全てを使って知覚し、自身を環境に溶け込ませている。中でも視覚による「見る」と「見られる」の関係は他者との距離を選び取ることを助け、その関係が相互に入れ替わることで他者たちと自己の間に関係性が構築される。また他の感覚、特に聴覚・嗅覚・触覚は環境を感じ取ることにたけているため、人間は聞こえる音・漂う匂い・肌にあたる感触を感じ取ることでその場所へと所属していく。隣から香る夕飯の匂いや、かすかに聞こえる自転車の鈴の音など、距離を介して隣人たちの気配を感じ取ることで個の領域を超えた集合の関係を創出する。

・坂道・路地・階段による場所の発見性

坂道によって集合住宅全体に断面的な奥行きができることで、街から連続する路地に多層的な連なりが生まれる。これにより建築全体がポアラスになり至るところに不均質な光が差し込むようになる。また建築内のトマソン階段やトマソン路地がファサードに穴をあけ自然の風や葉が舞い込むスリットとなる。これらの光がさす場所や風が吹き込む箇所、また坂道や階段そのものがもたらす場所の発見性により、人々は建築内で様々な空間に出会っていく。路地をさまよう中で、そこに住まう他者を環境の一部として抽象的に認識したり他人との間にしいていた距離を見直すきっかけを得ることで、その都度近づいたり時には離れたりと心地よいバランスをとっていく。まるで野良猫にそっと近づいて手を伸ばしていくような、アプリボワゼが起こる集合の形が立ちあられていく建築となる。

8 参考文献

- (1) 三木清著『人生論ノート』株式会社新潮社 pp72-73 (1954)
- イーフー＝トゥアン著 阿部一訳『個人空間の誕生 食卓・家屋・劇場・世界』株式会社筑摩書房 (2018)
- 南後由和著『ひとり空間の都市論』株式会社筑摩書房 (2018)
- 奥野健男著『文学における原風景』集英社 (1972)